

ワールドステイクラブの旅 ご案内

第4回 早春のウィーン、その魅力を極める プチ・ロングステイ 13日間

参加感想文

【期間】 2016年3月9日(水)～21日(月) 13日間

【費用】 航空運賃：概算で約158,000円(含燃油代)

地上費：165,000円(1人部屋追加料金68,000円)

*ウィーン滞在中の観光費用(乗り物代、入場料、食事など)は自己負担

【リーダー】 村上有三 別にガイドが案内役を務めます。

【ウィーンガイド】 レスリーさん

【ザルツブルグガイド】 君島さん

【食事】 毎朝食、昼食1回、夕食1回を含む(左記以外は自己負担)

【宿泊】 ホテル・グラーベン(前半)

ロイヤル(後半)

どちらもシュテハン寺院、オペラ座は歩いてすぐです。

【参加者】 5名

【リーダーから】

前回と同様もう少し滞在したいとの声があり、滞在を3日延ばしました。

1都市滞在としては長いと思いましたが、皆さん精力的で、後半は各自の日程でウィーンの街を満喫していました。

天気は前半少し寒く、雪の日が1日ありました。その日は午前中にウィーンの森から雪のウィーンを見渡せ、午後は雪が上がりきれいに街を見ることができました。

旅行後半は落ち着いた天気、楽に散策することができました。

この時期、寒いのではないかとの指摘がありますが、東京より2週間位前の気候で、動きにくいということはありません。今年で4回目でしたが、参加された皆様がウィーンの良さを満喫され、楽しく過ごされ、企画して良かったと思います。

来年も5名参加者がいれば、催行したいと考えていますので、早めに声をかけていただければと思います。ウィーンで逢いましょう。

馬場京子

かねてからの念願だったウィーン旅行が、実現できました。

寒さに弱い私にとっての旅仕度は、厚手のコート、セーター、帽子、手袋等、防寒着でいっぱい。

OBB鉄道(ドイツ、スイス、イタリア、フランス、ハンガリー、チェコ、スロベニア等に運行)、市電やバスを共通券で購入して、多くの観光地を案内していただきました。ホテル・グラーベンに着いて、まずポットで電圧ショートしてしまい、翌朝は部屋の鍵を開けられずあわてましたが、今では思い出になります。

美術史美術館での、ここでしか見られないフェルメールの絵、ラファエロ、クリムトの絵、ベルベデーレから見たウィーン、丸天井のカフェレストランでのお茶、優雅な気分でした。

シェーンブルン宮殿の広い庭を巡り、高台からのウィーンの景色は絵、そのまま。

ザルツブルク・ゲトライデガッセの看板の素晴らしさ、ウィーン大学の構内に並ぶノーベル賞授賞者の像、うっすら雪の寒さの中、ウィーンの森で飲んだジョッキで出てきたホイリゲワインは美味しかったです。

オペラ座の「アイダ」、憧れの楽友協会のコンサート、願いがかないません。

ナチスドイツに翻弄された国ですが、よくここまで人々の努力で立ち直れたものと、新旧混在した街並みを見ていると心打たれるものがありました。

良い旅をありがとうございました。

河田孝子

木々の芽吹きが微かに感じられる早春のウィーン、ドイツ語のイントネーションも手伝ってゲルマン民族には質実剛健な堅苦しいイメージを持っていましたが、観光地ウィーンでは文化的な柔らかさを感じながらの滞在でした。

ハプスブルグ家の600年を超える繁栄は、王宮宝物館、美術史美術館、自然史博物館、国立図書館等の膨大なコレクションを見て納得、シェーンブルン宮殿もしかり。

音楽家達の足跡も訪ねましたが、特にベートーベンゆかりの地「ハイリゲンシュタット遺書の家」は何故か心に残っていて、交響曲をもう一度聞き直す良い機

会になりました。

ウィーンは「音楽の都」と呼ばれるだけあって劇場も多く、国立オペラ座ではほぼ毎日のように公演があります。今回は「アイダ」と「ラ・ボエム」、フォルックスオーパーで「椿姫」、楽友協会でコンサートを楽しんでまいりました。

ウィーン3日目の夜は全員でオペラ座へ。馬場さんが和服をお召しになりとても素敵でした。初めて見るウィーン国立オペラ座の華やかな内部をリーダーが案内してくださり、「アイダ」を楽しみました。勇壮な行進曲が有名で、第1幕のテノール（ラダメス）の aria は見事でした。全体に男性的ですが曲は美しい。最後のシーン、エチオピアの王女アイダとエジプトの騎兵隊長ラダメスの二重唱に暫しうっとりしました。

ロージェと呼ばれるボックス席での鑑賞は人生初めての体験です。席の前にある個人用の字幕には「レクサス協賛」と出てきます。ボタンを1回押すとドイツ語、もう1回押すと英語、でももう1回押しても日本語は出てきません（これはオペラ座案内人のジョークです）。トヨタさん、日本人のファンも多いので近い将来に期待します。2階席の中央に立見席があり、公演日に早くから並べば3~4ユーロで見ることができそうです。前の手すりにスカーフで自分の場所を確保します。体力のあるオペラ好きにはたまらないシステムだと思います。

4日目夜は2人でフォルックスオーパーへ。旧市街から少し離れた地下鉄の駅からすぐ近くにあり、中に入りコートを預けると、劇場の入り口のところで女性がチケットを切り席に案内してくれました。チップを渡すと「ダンケ」と言ってにっこり。日本との違いに戸惑いながらゆったりとした赤い椅子に腰を下ろしました。前から3列目センターの席で大好きな「椿姫」を鑑賞しました。息遣いまで伝わる aria、二重唱、目の前のオーケストラボックスから聞こえてくる心に染み入るような間奏曲。主役のソプラノの出番が長く、曲はとにかく素晴らしい。演出は地味で衣装もシンプルでしたが、それでも今まで感じたことのない感動！翌朝まで興奮冷めず。今思い出してもとても幸せな気持ちになります。フォルックスオーパーでは、庶民が少しおしゃれをして気軽に音楽を楽しむ様子が感じられます。帰りクロークでコートを受け取り、男性が女性のコートを着るのをほぼ全員手伝っていましたが、連れ合いにはその気配なし、ちょっとがっかり！

5日目午前11時、素晴らしい音響効果を楽しみに、全員で楽友協会のコンサートへ。まず大好きなヘンデルの「水上の音楽」、この曲はやはり朝にぴたりと勝手に感動し、ハイドンやエルガーの曲を聞きました。

この日は子供達のためのオーケストラの説明があり、思いがけない楽器もあってそれなりに楽しみました。楽友協会のホールは演奏中照明が落とされず、きらびやかな装飾のある明るい中での演奏もなかなかいいものでした。

11日目、ウィーン最後の夜は「ラ・ボエム」を鑑賞しました。西村さんと馬場さんは先に帰国されたので、村上さんと3人でオペラ座へ。ボヘミアンの貧しい詩人ロドルフォとお針子ミミの悲恋の筋書きですが、気になる最後のシーンは、嵐のような音楽による感動的な幕切れでした。第1幕ミミの「わたしはミミ」の aria は何度聞いても素晴らしい。でも今回は大柄のミミさんで可憐さが少し足りない感がありちょっと残念。でも大満足でウィーンの旅を締めくくることができました。

音楽に偏った感想になりましたが、音楽だけでなく王宮、美術館、博物館、シェーンブルン宮殿、画家クリムト、ザルツブルグ、ドナウ川、北の森、南の森、音楽家達の眠る中央墓地など、感動が沢山ありました。ザッハトルテの食べ比べをしたり、昼食に入ったカフェレストランでは、隣のテーブルの目の覚めるような美人の母娘連れと同じメニューにしたり、マリー・アントワネットの好物だった焼き菓子クグロフもお土産にして、美味しい思い出もできました。オペラにも詳しく、ウィーンを知り尽くされたリーダーの案内に感謝の一言です。とてもお元気な西村さんに驚きました。馬場さん、外国では特に和服姿はいいものですね。仕方なく？同行してくれた連れ合いもそれなりに楽しんだ様子です。

皆様ありがとうございました。



ザルツブルグ ベルベデーレ宮殿にて